

道元禪師使用の「わたくし」について

谷 本 順 應

の轉じたものかといわれ、(一)公ならぬこと、表立たぬこと、(二)自己の利益を計ること。の二つに大別される。また代名詞としては、一人稱單數自稱代名詞である。特に漢字の用法として前記を強調したものに、一個人に關する事柄、ひそか、秘密、私慾、ねじけた心、その他數種の解釋のしかたがある。このように「私」においても常に公に對する反對、いわゆる一個人ないしは利己的所有内容を附帶した表現が多い。

道元禪師の御著述中に使用せられている「わたくし」の語は極めて稀である。その數は『正法眼藏』九十五卷中、「わたくし」が七つ「私」が一つ、以下「私」が『學道用心集』に一つ『永平清規』には二つ「私曲」二つ「私意」一つ、懷弊和尚編纂の『正法眼藏隨聞記』に「私」七つ「私曲」五つ「私用」一つ計二十七箇がある。これを當時の他の祖師方の著についてみると、例えば『往生要集』には一字もなく、『歎異抄』も一語にすぎないが、日蓮上人の御文書中、特に問答體のものには批較的多くみられる。また三祖徹通義介和尚編の『御遺言記』には、懷弊和尚の語として二ヶ所とその使用は極めて少ない。次に一般資料として日記、隨筆、物語等についてみると、『方丈記』『徒然草』には一字もなく、『源氏物語』『枕草子』『狂言』『金槐集』『平家物語』『義經記』等には若干用いられている。こゝで一應言えることは、宗教書及び『方丈記』『徒然草』のように客觀的視野のもとに書かれたものには「私」の使用は少ない。が狂言のように自己の動作、感情を主として書かれたセリフ、乃至生活活動や主觀的立場をとる書物には比較的多い。故にこの「私」は日常語として度々使われていたのであらう。こゝで「私」を明確化するのためにその意義を一應掲げるならば、「わたくし」は「我盡し」

當時、現今の「わたくし」に代る言葉として用いられていたものに「われ」がある。道元禪師の『正法眼藏』その他の著には多數に「われ」「わが」が用いられており、その内容も一人稱所有、單數、復數とその活用範圍は廣い。こゝで一人稱としての「わたくし」と「われ」を比較してみると、「わたくし」は單數であり、自分個人を指すが、「わたくし」の下に「共」「等」を附け「私共・私等」と複數にしたとしてもそれは自分を主とした範圍の所有を意味したものであり、それはうちわのものという域を出ない。従つて範圍も限定される。これに對し、「我」は「我」という同じ語を重ねることによつて、「我々」という複數を作り、れをがに變えるだけで所有を表わす語ともなる。しかし、この特徴は、「我」と「我」という同格名詞を重ねることにある。そこには私個人ではなく、私をも含む衆生があり、頭角を現わさない個々がある。しかも「われ」という場合の「われ」には沒我の一團であつて、その中の「われ」は自分自身でもあり、汝でもあり集團でもある。また「われ」は人間であれ、動物であれ、山川草木であれ、そこには人間價值存在以前の個々の存在があり、共同體がある。従つて山川草木と人物個々は同格的立場をとり、人と人とは同格であると同時に、人と物とも

同格の立場をとる。そのとき始めて「大地有情同時成道」の宗教的把握の前提が容易に知らされるのであり、禪師が何故に「われ」を用いられ「わたくし」を限定した意味でのみ使用せられたかご理解されるのである。上記のことを一應假りに表にしてみた。

われ〔吾〕——廣義——抽象的——複數——沒我的——自我否定——普遍的——無我わたくし〔私〕——小義——具體的——單數——個性的——自我肯定——自己的——有我

次に、道元禪師の數少ない「わたくし」語の使用をみるに、「わたくし・私曲・私意・私用・ひそか」等がある。このうち「私曲」というのは、わたくし、よこしま、邪曲等の意があり、禪師は多分に「私曲」を用いられている。更に「私意」であるが、これは全體の中の自分ではなく、六識で書き出された現象範圍を自分で全體だと掌握し、そこから發せられた意見をいふ、それらは内容も狭く、個人的な見解ということになる。「私用」の場合は「一定の織は是れ小分なれども、賢人は私用せざること聞えたり」という故事を引用したもので、この場合の私用は自分のことに用いる意を表わしている。次に、かくしごとの意に用いられているものに、「因果の道理歴然としてわたくしなし」がある。この「私」は所有にかゝる言葉のようではあるが、むしろこれをも含め「隠す、くらます」という意に用いて始めて趣旨をあかすことが出来る。それはまさに、まづかな炎の中を紙の鎧を着て通るようなものであり、かくしても隠し切れない意を因果の法則で示すのに用いられた用法である。次に「私欲」として解するものに、「わたくしにつひやさざらんと行持するなり」がある。また「私」を自分のものという所有を含む意に解するもの「心これわたくしにあらず」がある。更に、「私」を

して私見という見方をするものに「況や衲子は一切私を用ふべからず」があり、個人的判斷、ないしはからの意がみられる。更にまた、「私」を自我の主張を強調する語として、「學道の衲子私を存することなかれ」また「善知識に隨つて衆と共に行じて私なければ云々」の用い方がある。「私」を「ひそか」とあつかうものに禪師は支那の故事を引いて「白金を私に佗室に寄することなし」を用いられている。この「ひそか」も一人稱單數において始めて成立する語である。

以上禪師の使用せられた「わたくし」語を一應理解して來たのであるが、その特徴としては、禪師が使用せられた「私」の語のあとには必ず否定ないし打消の言葉や意味を持つ語が続くということである。すなわち「私を用ふべからず・私曲を存することなかれ・私につひやさざらん」等々である。これは「わたくし」の言葉の持つ性質が、佛教の根本理念である無我到對し、むしろ反對に自我の迷執を糾す語としての性格を有しているところによるのではなからうか。しかも、純然たる人稱代名詞としての扱い方でなく、名詞的であり、形容詞的扱い方でもある。また「私」という常有としての吾我あるいはその具體相としての我執をあきらかに否定された概念の否定につながつて當然であろう。禪師が佛法そのまゝを「わたくし」という微細な言葉の上にも留意していられたことがうかゞえる。

その他、禪師の餘の著述においても、如上の配慮がなされていることが分り、以上の裏付けがなされるのであるが、紙幅の都合上、次の機會にゆずりたい。

(註略)